

## 使徒言行録8章1b節～25節

### 『福音は魔術ではない』

ステファノは最高法院で福音を語り、人々によって都の外に引きずり出され、石打ちにされ、殺害されました。これは生まれたばかりの教会にとって、とても大きな事件でした。というのも、このステファノ殺害を契機にエルサレム教会に対する大迫害が起こったからです。

ただこの迫害というのは、エルサレム教会のすべての人々に対する迫害ではなかったようです。以前申し上げたように、エルサレム教会の中には、ヘブライ語を話すユダヤ人たちと、ギリシア語を話すユダヤ人たちがいました。

ヘブライ語を話すユダヤ人たちの多くは、ユダヤで育ち、ユダヤ教の環境の中で、イエス・キリストと出会い、福音を信じる者となった者たち。いわば生粋のユダヤ人。一方ギリシア語を話すユダヤ人というのは、ユダヤ以外の外国の地で生まれたり、暮らしたりしてきた人々。ヘレニストと呼ばれる人々。両者の間には、当然様々な違いがあり、教会の中でもそれは問題にもなっていました。この大迫害で、迫害されたのは、ギリシア語を話すユダヤ人、ヘレニストの人たちであり、ヘブライ語を話す人々は同じ教会の中にいるとは言ってもあまり迫害されなかったのではないかと、思われるのです。ユダヤ生まれの彼らは神殿の生活も、律法も大事にしていた。だから、ユダヤ教の人々は、おそらくは仲間のように思っていた。だがヘレニストたちは、神殿に対して、また律法に対して、絶対的なものとも思っていなかったし、神聖視もしていなかった。ステファノの説教にある通りです。

迫害は、ヘレニスト・キリスト者に向けられた。そして彼らはエルサレム教会から離れざるを得ないことになっていくのです。パウロもこのとき迫害に加わった一人だったことが記録されています。ヘレニスト・キリスト者の家に押し入り、教会で暴れ、男女を問わず牢にぶち込んでいた、ということです。それは初代教会にとって極めて大きなダメージとなった。エルサレム教会に残った使徒をはじめ、生粋のユダヤ人キリスト者にとっても、大きな痛手であったことは想像に難くないのです。

そうした中、ステファノと同じように、ヘレニスト・キリスト者のために選ばれた7人のうちの一人、フィリポはサマリアの町での伝道を開始し始めました。

サマリアはユダヤに隣接する地域。ユダヤ人にとっては、もともと親戚筋にあたる民です。しかしサマリア人はユダヤ人と外国人の混血民族で、ユダヤ人

にとって、それは恐ろしいほどの墮落であり、当然ユダヤ人はサマリア人を蔑視したのです。なまじの外国よりも、サマリアは遠い国なのです。むしろ遠い外国ならば、こんな近親憎悪はない。しかしフィリポはそのサマリアで伝道を開始したのです。

そもそも、エルサレム教会においては、ギリシア語を使うヘレニスト・キリスト者は生粋のユダヤ人キリスト者から差別されていたのではないかと思われまます。そこに少なからぬ葛藤もあった。そしてただ今はヘレニスト・キリスト者故にエルサレムを追われることを余儀なくされている。フィリポにとって、今サマリアで伝道することは、いろいろな差別や蔑視といった葛藤を抱えたサマリアの民に福音を語ることであり、それはフィリポ自身経験してきたことであります。

フィリポはサマリアの町でキリストを宣べ伝えました。そしてキリストの名によって力ある業もなした。悪霊にとりつかれた人の悪霊が出ていくという働きです。人々はフィリポの話に聞き入り、その業を喜んだのです。

フィリポがサマリアの町でキリストを宣べ伝える中で、シモンという名の魔術師がフィリポのもとにやってきます。魔術を使う彼がフィリポの力ある業に目を奪われたからです。シモンはこれまで、魔術で人を引き付けてきました。

しかしシモンは、フィリポによって悪霊にとりつかれた者から悪霊が出ていくのを見て驚くのです。一言で言えば、自分の魔術とは違う何かをフィリポに感じたからでしょう。

シモンがどんな魔術を使っていたのか、詳しくはわかりませんが、魔術というのは悪霊をはじめ、いろいろな霊に働きかけて、人間の願いや求めを実現させようという働きです。超自然的な力がそなわっていると信じた者が、占いや、迷信や、いろいろなものを用いて、霊と交渉するのです。

シモンはこの力を誇示して、人々を驚かせていた。そのシモンがフィリポの行うしるしを見て驚いたのです。しかもサマリアの町の人々がフィリポから洗礼を受けていく。シモンはこの不思議な力に驚き、自分も洗礼を受け、フィリポにつき従うようになるのです。

エルサレムにいる使徒たちは、フィリポがサマリアで伝道を開始し、しかもサマリアの人々が神の言葉を受け入れたということを知り、ペトロとヨハネをサマリアに遣わした、というのです。どうしてこういうことをしたのか、しばしば議論されるところであります。一つの理解は、フィリポがサマリアで伝道し、受洗が多く与えられた。それを聞いたエルサレム教会は、二人の使徒を遣

わし、フィリポに洗礼の足りないところを補い、エルサレム教会の権威を示した、という理解です。

教会は、この後、世界伝道が進められ、各地に教会が生まれていった。しかしあくまでも、エルサレム教会がそれらの教会の上にある首座教会なのであり、聖霊の授与は使徒によって与えられるのだ、という理解です。

こうした理解をする人はとても多い。しかし、今回あらためてこの聖書箇所を読み、そうではないのではないか、と思わされています。フィリポがサマリアで伝道を開始した。それはまさに世界伝道の第一歩でした。そして、エルサレム教会の人々にとっても、サマリアで受洗者が与えられた、ということはやはり深い喜びだったでしょう。さまざまな確執を抱えたサマリアの人々がイエス・キリストの福音を受け入れた。人間は様々に仲たがいます。差別や蔑視もあり、隔ての壁も作る。しかし、イエス・キリストの福音は人間の違いを超えて、受けとめられ、信じられ、その救いを受けていく。それはまさにイエス・キリストにある一致なのです。

エルサレムの教会は、自分たちの教会の代表であるペトロとヨハネを送り、この一致を確認したのです。エルサレム教会とサマリアの教会がイエス・キリストを信じる信仰において、つながれていく。二人の聖霊の働きを祈り、全ての受洗者の頭に手を置き、感謝の祈りをささげたのではないか。

教会は、人間のさまざまな罪や悪にもかかわらず、聖霊の働きにおいて一つとされる。それは違いの解消というようなことではなく、イエス・キリストにおける一致なのです。フィリポはこのエルサレム教会の祈りをどれほど豊かなものとして受け取ったことでしょう。

シモンは使徒たちが手を置くことで聖霊が与えられるのを見て、「わたしにもその力を授けてください」と言って、なんとお金をもってきて、それを売ってくれと言ってきた。彼は使徒たちの働きも魔術の一つだと受け止めていた節がある。お金で買える魔術の一つ、と思ったのではないか。教会用語で「シモニア」英語であれば「シモニー」という言葉がある。シモンするということで、通常「聖職売買」と訳されます。彼は自分が聖霊を受けることをここで考えていません。自分自身が聖霊を受けて、神によって新しくされ、変えていただくことを望まず、ただ自分が聖霊を賦与する力を獲得して、それで自分の力を誇示したい、と思っている。

シモンにとってフィリポのなした力ある業も、使徒たちの働きも、魔術の力にすぎない。自分にもその魔術的な力が与えられ、それを人々に誇示したい、そういう力としてしかとらえていない。

魔術は呪術。悪霊であれ、他の霊であれ、何であれ自分の力で、操れればいい。占いか手相とか、根本そういうことです。それは自分の力を誇示するという特徴がある。しかし、フィリポにせよ、ペトロにせよ、彼らの働きは、自分の力の誇示ではない。ペトロは神殿で足の不自由な男に向かって言いました。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。フィリポや使徒たちの働きは、イエス・キリストの十字架と復活の上に立つものです。キリストの働きを離れてはならない。フィリポが福音を語り、力ある業をなしたのも、イエス・キリストの故です。ペトロも全く同様です。それは全く自分たちの力ではない。イエス・キリストを信じる信仰のゆえに、この働きへと押し出された。シモンはその力をお金を出して買おうとした。ペトロの叱責の言葉は激しいものでした。「この金は、お前と一緒に滅びてしまうがよい。」

まさしく、そのような自分が滅びる以外ない。滅びて、新たな自分を創造していただく以外にはない。「この悪事を悔い改め、主に祈れ。」それ以外には救われる道はない。シモンがこの後どのような歩みをしていくのか、聖書はそのことを記していません。イエス・キリストの伝道が始まる。そこでは必ず、人間の力を誇示し、人間の力によって生きようとする勢力とぶつかっていく。それは魔術的なものであり、現在もなお、人間は魔術的な力にしばしば呑み込まれていく。そしてそれはシモンのように洗礼を受けた後も、その力に支配されていくことも多い。イエス・キリストの恵みと信実がわたしを活かし、この人生を歩ませ、終わりの約束の中に生きる者とさせてくださる。そこから離れようとさせる力がこの世界には働いている。シモンはまさにそのような存在でもある。しかしそのような人間が悔い改めて主に祈るよう、フィリポは伝道を開始した。ペトロもまたそのために働いた。そして神の聖霊はわたしたちの中で働いてくださる。わたしたちもそのことを信じて、この世界の中で、主の福音を宣べ伝えていきたいと思うのです。